

ハンドボール

特集

第16回 アジア競技大会

男子53回女子46回全日本学生選手権大会

第62回全日本総合選手権大会(男子の部)

1.25

JAN.FEB.2011・No.516



[表紙写真：アジア競技大会女子準決勝、日本対韓国戦から、藤井紫緒選手：写真提供・スポーツイベント社]

財団法人 日本ハンドボール協会

<http://www.handball.jp/>

toto
FOR ALL SPORTS OF JAPAN

molten[®]
For the real game



For the real game

「プレーヤーの技術や意志が100%発揮される時、スポーツは本物になる」

私たちモルテン・ブランドは、この信念をもとに

世界に類のないボールと

スポーツエキップメント・メーカーとして

つねに完璧な製品づくりを目指しています。

日本リーグ唯一の公式試合球
全日本実業団連盟主催大会
唯一の公式試合球

H312 ヌエバ 国際公認球 検定球

軽い・人工皮革、3号球、ラテックスチューブ

H212 ヌエバ 国際公認球 検定球

軽い・人工皮革、2号球、ラテックスチューブ



www.molten.co.jp

株式会社 **モルテン** 東京本社 〒130-0003 東京都墨田区横川五丁目5-7

いよいよ決戦の年！！



(財)日本ハンドボール協会専務理事 **川上 憲太**

皆様、明けましておめでとうございます。このメッセージが皆様に届く頃には、1月の男子世界選手権の結果がすでに出ていることと思います。

2008年から3年間に亘り全日本男子・酒巻監督が「世界で、アジアで勝つにはまずフィジカル強化だ」として、かたくなに取り組んでいるのがフィジカルトレーニングです。これは『高く、重たくて、スピード』のある世界、アジアのハンドボールに勝ち抜く基本的な部分です。これをベースにまずはきちんと守れなければ勝機はつかめないのです。『しっかり守って、速攻』が全日本男子の勝ちパターンです。60分間、全力で一瞬のスキも無く全員で守り抜いて相手の攻撃をブレイクし、速攻で点を取る、まさに「肉を切らせて骨を断つ」ような覚悟で挑まないといけません。アジアの各国の実力は紙一重だと思っています。ほんのちょっとした緩みが勝敗を分けることになります。ロンドンオリンピックの切符は、この気力・体力・集中力の集結で勝ち取るものだと思います。

「人が動く・ボールが動く」全日本女子・黄監督が掲げたこの3年間の指針が結果に結びついてきています。アジア競技大会、アジア選手権での「アジアNo.1になる」為のチームの追い込み、采配には決戦の日への手応えを感じさせるどころです。

ロンドンオリンピック予選は、今年の10月に女子は中国、男子は韓国で開催されます。

男女とも、もう1枚、2枚の台頭してくる選手を加えてあと8ヶ月、徹底したトレーニングを積み重ねないといけません。男子においては、「ヨーロッパ、中東、韓国、中国」と、どんどん国外での合宿を重ねること、女子においても「高さ・スピード」に対する対策を更に充実させ、「カザフスタン、中国への対策」を含めて、究極の目標に向かって邁進して欲しいと思います。

今年は「うさぎ年」ということで、各方面で飛躍を望む声が聞かれますが、現実には日本の内外における環境は大変厳しいものがあり、スポーツ界への影響も否めません。その様な中で日本協会の運営執行にあたり、更なる覚悟が必要と身の引き締まる思いであります。一方で、私の気持ちは決戦の年を迎えて何故か「わくわくどきどき」と高鳴っております。常日頃からご支援、ご理解、ご協力を賜っています全国の皆様と共に、是非とも宿願の歓喜の祝杯をあげる年にしたいと思います。

皆様、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

第16回 アジア 競技大会



女子・銀メダル、
男子・銅メダル獲得



「第16回アジア競技大会」は、全て写真提供：スポーツイベント社

■最終順位■

【男子】	【女子】
1位 韓国	1位 中国
2位 イラン	2位 日本
3位 日本	3位 韓国
4位 サウジアラビア	4位 カザフスタン
5位 カタール	5位 北朝鮮
6位 バーレーン	6位 チャイニーズタイペイ
7位 中国	7位 タイ
8位 クウェート	8位 インド
9位 インド	9位 カタール
10位 香港	
11位 モンゴル	

第16回アジア競技大会報告

団長 川上 憲太

第16回アジア競技大会は2010年11月12日の開会式から11月27日の閉会式まで中国三大都市のひとつ広州で繰り広げられました。

大会は45カ国42競技参加人員1万4千人と北京オリンピック並みの規模で行われ、中国の国をあげての大会運営が際立っていました。

おりしも日中関係そして大会期間中に起きた韓国・北朝鮮問題等、国際問題が懸念される中、日本選手団に対しても十分な行動規範の徹底がなされ、選手村等のセキュリティが大変厳しかったことも手伝って、大きなトラブルは無くむしろ各国選手間の交流、中国国民の温かいもてなしで大変友好的に大会が運営されました。

天候も連日好天続きで気温15～25度と日本の初夏並みのコンディションが続き、選手達も快適に過ごせたと思います。練習会場・試合会場へはバス移動（25～40分）で大変スムーズに運営され、食事も24時間体制でおおむね好評で、プレーへの大きな障害とはなりませんでした。

今回選手村の外では、バスで15分の場所にJOC・JISSにて設置頂いた「マルチサポートハウス」により多方面にわたる日本選手団へのサポート体制が整備され、ハンドボール選手団も頻繁に利用させて頂き、戦いにあたって大変効果があったと思います。

ハンドボール競技は男子11カ国、女子9カ国が参加し、男女ともA・Bグループによる予選リーグ、各グループ上位2チームによる決勝トーナメントで戦われました。

試合の結果・内容・評価については強化本部長、スタッフの報告をご参照ください。

試合会場は広州の2つの大学のキャンパス内（キャンパスの体育館とは思えないスケール）にある体育館が使われ、観客数4,000人収容のハンドボール競技として申し分ない施設でした。セキュリティチェックが大変厳しい中観客数が心配されましたが、中国戦は満員だったのを始め応援も過激な行動は見られず各国に公平な応援がなされていました。レフェリングは従来の大会のような偏ったジャッジは無く、AHFのテクニカル担当によりフェアに進められました。

「世界を奪い返す」「アジアNo.1に返り咲く」の目標のもと、まさにアジアNo.1を決める本大会に臨んだ訳ですが、結果は男子銅メダル、女子銀メダルでありました。目標であるアジアNo.1には届きませんでした。

その中で女子代表が宿敵である韓国に準決勝で勝利したことはまずは評価に値するものを思います。しかし中国の台頭の前には力及ばずでありました。

本大会にアジアの強豪が出揃った訳でこの中で勝ち抜かなければロンドンオリンピック出場はありません。男子は韓国との戦いがありませんでした。中東勢の更なるレベルアップも考えられます。一瞬のゆるみが大きな点差に広がる非常に僅差の戦いが予想される中、これからの積み上げにより綿密・周到な準備が必要と痛感しました。裏を返せば、日本にも十分チャンスがあるということです。女子は今回の状況を更にアップさせる為、選手補強、戦術、戦略の上積みを行って準備を進めていって欲しいと思います。

本大会の出場に際し、沢山のご支援ご協力を頂きました。関係各位の皆様に厚くお礼を申し上げますと共に、今後共宜しくお願い申し上げます。

男子

男子代表監督 酒巻 清治

日本代表男子チームは初の金メダル獲得を目指し大会に臨んだが、既に結果についてはご承知の通り、準決勝イラン戦において残り5秒での失点により敗戦。

3位決定戦では2度目の対戦となったサウジアラビアをなんとか下し、銅メダル獲得にとどまった。

アジア大会と世界選手権が同一年度内に開催されるシーズンにおいて、各選手とも気持と戦術の切り替えが非常に重要なファクターとなることは重々承知していたものの、やはりゲームは生き物、想像していた以上に「準備期間」の重要性を認識させられることとなった。11月1日に味の素NTCに集合し、筑波大学での野外研修、結団式、激励会、などにより緊急のチームビルドを行い、戦術においては8月欧州遠征までの課題へ取り組みながらチーム強化を図り大会に臨んだ。中国国内の情勢を気にしながらの訪中となったが、選手村の施設も素晴らしく特に大学生のボランティア達が対日感情などどこ吹く風、献身的に協力してくれたことは我々チームスタッフには最高の「もてなし」となった。

また、今回JOC初の試みとして「Team Japan サポートハウス」が選手村から20分ほどバス移動したホテルに設置され、日本選手団は温かい日本食を頂き、高圧酸素カプセルなどで心身の疲労を回復させることにフル活用出来たこともメダル獲得への大きな後押しとなった。

戦前よりキーポイントとなる試合に位置付けていたのが初戦のカタール戦。2月には抑え込んだ大型ポストに対して問題を抱えるようでは苦戦は免れないと覚悟はしていたものの、やはり悪い予感が的中。防御でリズムを作ることが出来ず、攻撃においては焦りから単調なコンビネーションに終始し、痛い星を落としてしまった。この時点でグループ1位

の可能性はかなり低くなると精神的に追い詰められた状態で残りの試合を闘わなくてはならなくなったわけだが、二つの要因と選手の努力により奇跡的に予選リーグを1位で通過することができた。1つ目の要因として試合日程に恵まれていたこと。予選のグループの対戦国ではモンゴル・インドあたりは計算できる相手であり、その試合が強豪国との間に組まれていたこと。次に過去の経験から、初戦を落としたこととその後のカタールがいまいち調子が上がらなかったことで、得失点を露骨に計算できる状況になることが予想されたことによって、選手のモチベーションを回復できたこと、などがあげられた。「選手の努力」と前述した点はここから、初戦の敗戦のダメージは大きく顔色のない選手たちだったが、モンゴル戦での得失点へのこだわり、中国戦での一体感はコーチングスタッフが要求したものではなく、選手自らが築き上げたものだった。中国とカタールがグループ最終戦で引き分けるドラマがあり、予選リーグ1位で通過し準決勝のイラン戦に進むことが出来た。準決勝では気持ちとパフォーマンスが噛み合わず、攻守の切り替え時のリーダー不在とチーム戦術の統一感の欠如により、逆転負けを喫することになった。

この時点で再びチームの士気は低下し、選手たちはかなりの精神的なダメージを受けていたが、12年ぶりのメダル獲得に向け何とか気持ちを切り替え、3位決定戦に臨まなくてはならなかった。

3位決定戦では再びサウジアラビアとの対戦となった。準決勝敗退後選手たちがいかに気持ちを切り替えたか私の知るところではないが、ウォーミングアップを見た時点で「大丈夫」だと感じた。サウジアラビアは予選リーグの日本戦の敗戦はかなりショックだったようで（後にサウジの監督から打ち明けられた。というのも2月に接戦を演じている相手に徹底的に打ちのめされてしまった、ということらしい。）準決勝韓国戦での主将に一発レッドカードによる1試合の出



場停止の不運も拍車をかけていたようで、何かしらウォーミングアップでも元気がない。試合は立ち上がり10分の攻防が全てであった。相手の攻撃の長所を徹底的につぶし、相手はなかなかリズムに乗れず、終始日本がゲームを支配する形で進み、相手ではなく自分たちに勝った日本が12年ぶりにメダルを獲得した。

最強豪国・韓国との対戦が出来なかったことは残念でならず、メダル獲得ということよりも悔しい気持ちをもったの帰国となった。

この機関誌が発行されている頃、我々は世界の強豪と相見合っている。今回の課題はロンドン予選突破のためのチーム力

アップに必要なものの精度が不十分であったと認識せざるを得ない。限られた時間の中で世界と闘いながら今回の課題克服に向け全力を尽くしロンドン予選に向けてさらにチーム力をアップさせていく。

大会参加に向け、ご尽力頂いたJOC並びに日本協会関係者、シーズン中にも関わらず惜しみなく選手を派遣して下さった所属チーム、遠い広州までご声援頂いたファンの皆さん、別れの際号泣するほど献身的なサポートをしてくれた中国人ボランティア、この誌面をお借りして御礼申し上げます。アジア競技大会の報告とさせていただきます。有難うございました。

女子

女子代表ヘッドコーチ 黄 慶泳

アジア大会について直前強化合宿の流れと大会の結果に対してご報告いたします。

大会の準備について

■直前強化合宿

1. 直前強化合宿
 - 11月1日ー13日(味の素NTC)
2. 強化ポイント
 - ①トータルフィットネス(気力・筋力・走力)の再強化
 - ②優勝争いが予想される対戦国に対する戦術&戦略の確立(韓国、北朝鮮、中国、カザフスタン)
 - ③女子大学生、高校男子と練習ゲームを通して試合感覚&役割確認
 - ④点が取れない時間帯のゲームマネジメント力強化

大会について

■第1戦(勝):対北朝鮮 31-27

国際試合の初戦として北朝鮮チームに対する情報不足の面もあって、前半はもたもたする戦いになることを覚悟して試合に入る。

予想通りに前半立ち上がりから相手の勢いとスピードに圧倒されて追いかける展開になる。中盤以降からは攻撃的な守りが機能してビハインドを振り出しにして前半終了。

後半は、守りから速攻の点数が増えてきて一時期7点差まで突き放すゲーム展開となったが、メンバーチェンジを色々する間に失点も増えて、最終的には4点差で逃げ切った試合である。

■第2戦(勝):対インド 32-16

前日の課題修正と同時に基本プレーの徹底をテーマとして試合に入る。

前半の立ち上がりから強引な突破に苦しめられる展開にな

っていたが、速攻による得点で大きく突き放して前半終了。

個々が孤立した守りをよりコンパクトに守ることと、ハイテンポの速攻の展開をすることをハーフタイムで再確認して後半に入る。後半立ち上がりから守りの修正は出来ていたが、途中から審判の判定に対するストレスからくるチームプレーの崩れが多く見られる展開となった。

試合は勝ったものの前日の勝ちゲームからくる気の緩みもあって、審判の判定に耐え切れず自分たちの姿を失ってしまう弱さが見られて課題が残る試合であった。

■第3戦(敗):対中国 19-25

予選1位通過をかけた戦い。前半はポストを徹底して守る低いディフェンスの戦術で戦う。結果として守りの部分は成功したが、速攻とセット攻撃で足が動かず点に結びつけることができなかった。

後半からはより積極的な守りから走る戦術を導入した結果、互角の戦いをしてくれた。

前半の戦い方が悔やまれる試合であった。

■準決勝(勝):対韓国 29-28

準決勝はA組1位の韓国との対戦。相手の個人技を組織でカバーする意識を持って6:0ディフェンスで対抗する。攻撃に関しては相手の裏のスペースとアウトスペースを徹底して狙う意識の中で組織的に動く。両方の戦術が上手く機能していて前半を4点差リードして折り返し、後半も中盤まで一時期8点差まで突き放す。しかし、不正交代からの2分間退場の間に相手に追い上げられて苦しい時間帯が続いたが、最後は守り勝って執念の1点差の勝利。

理想とする数字とは違うが狙いの1点差勝ちが出来たこと、接戦を勝ち切った経験は今後の戦いに大きな自信になるはずである。

■決勝:対中国 31-22

念願の国際舞台でのファイナルは予選ラウンドで一度負けていた中国との戦い。体格の大きい中国に対して攻撃的な守りからの速攻と粘り強く大きく揺さぶりながらアウトスペースを攻めることを意識して試合に入る。

前半は我慢強く守りリードされながらもゲームマネージメ

ントも出来ていて、1点ビハインドで折り返す。

後半守って速攻の形で逆転を狙うが、裏を取られる失点が増えて早い速攻が出来ない。攻撃も単調になり中央に追い込まれて高い壁を打ち

破ることが出来ず、苦し紛れのシュートで決定率も低くなる。

結果として後半大きく突き放される完敗であった。

課題&今後の取り組みについて

韓国に勝たなければアジアNo.1 になれないとの考えの中で2年間チーム強化を進めて来た。それは韓国に勝つためのフィジカル強化と基本戦術の徹底であった。そして今現在のアジアチャンピオンである韓国を倒すことになる自然に他の国にも勝るとの客観的な目線も含まれていた。

しかし、今大会の戦いと結果によって韓国だけではなく長身の中国とカザフスタン、北朝鮮という新たな壁があると認識している。中国はさらに体格の大きい選手が構成されていて、近年のアジア大会とオリンピック、そして世界選手権を経験して来た中心選手がチームをしっかり引っ張っている、ゲーム運びのテクニックとプレーの上手さもピークに達していると感じる。カザフスタンに関しても最近ロシアコーチを新しく招聘してからは試合の諦めがなくなっていて、守りのバリエーションも増え速攻がシンプルで非常に速い。北朝鮮は国際経験が乏しいが、スピードとスタミナはアジアで一番であるのは間違いないし、戦う執念は国の特性もあって別格のものがある。今大会で初戦の北朝鮮と準決勝で韓国に勝ったことは色々な準備をした中で収穫もあり、選手たちには良い経験と自信になったと感じる。

しかし、体格の大きさにプレーの強さと上手さを備えて来



ている中国は、乗り越えなければならない壁であることを改めて強く認識していると同時に危機感を覚えている。

女子代表チームの今後の強化ポイントとしては

- ①連戦を勝ち抜くためのトータルフィットネスの更なる強化
 - ②韓国に加えて中国に対する徹底した分析&戦術、戦略作り
 - ③練習ゲームも含めて国内、国際試合経験を増やして実戦中でのチーム強化
 - ④速攻も含めた攻撃力の強化
- を重点的に考えている。

上記の項目は現時点でチームの課題として考えていることだが、長身選手の発掘と集中強化が日本としての戦略的な課題であることは間違いない。

今回のアジア大会では喜びもあり、悔しさも味わいました。

目指すのは金メダルのみ、金メダルが取れなかったらオリンピック出場は夢の話に終わると覚悟して大会に挑みました。しかし、準決勝で韓国には勝ったものの結果としては決勝で中国に負けての銀メダル。乗り越えなければならない壁(中国、カザフスタン)が高いと認識していますし、危機感を覚えています。相当な覚悟で努力を積み重ねれば今現在抱えてある課題は克服できないと思います。

皆様のご理解、ご支援頂きながらまた新たなスタートを強く踏み出して行きたいと考えますので、今後とも女子代表チームのご声援をお願い申し上げます、アジア大会のご報告と致します。ありがとうございました。



株式会社 イスミ

本社/〒732-0828
広島市南区京橋町2-22
TEL (082) 264-3211(代)



暮らしの夢を
ひろげたい。

時代の流れとともに刻々と変化する
お客様のニーズ、数ある商品の中から、
常に新しい価値を厳選して
お届けするゆめタウンは、
流通のエキスパートとして、
暮らしのパートナーとして、お客様とともに
暮らしの夢をさらにひろげたいと考えています。
もっと大きな明日へ。
動き続けるゆめタウンです。

戦評

男子

▼予選Aグループ

カタール 33 (17 - 17、16 - 10) 27 日本

アジア大会の初戦はカタール。立ち上がり、門山・宮崎の得点で4対4の同点。カタールはポストにボールを集め得点を重ねていく。15分、DFシステムを3-2-1に変更し相手のリズムを崩そうとするが、速攻で村上が負傷退場してしまうなどなかなかリズムにのれず11対14とリードされてしまう。流れを変えたい日本は宮崎・野村・末松らの得点で加点し、前半を17対17の同点で折り返す。

後半5分まで豊田・富田・門山のゴールで20対20とするが、ミスからの失点で20対22。その後も宮崎、野村らの得点で食らいつくものの退場者をだしてしまい20分で23対26。21分、海道のカットインが決まり24対26。何とか追いつきたい日本だが、焦りからミスが多くなり、それを速攻に持ち込まれ、連続失点で25分で25対32と7点差に。残り5分を切り、宮崎が連続得点するが、27対33で敗戦。大事な初戦で勝点を得ることができなかった。

【得点】9点：宮崎、8点：野村、4点：村上、2点：門山、1点：豊田、末松、海道、富田

日本 64 (28 - 10、36 - 4) 14 モンゴル

アジア大会の2戦目はモンゴル。立ち上がりから積極的なDFで相手のミス誘いを、末松の速攻で先制すると、野村・海道・富田・武田と4連続得点で5対1。中盤以降もGK浦和を中心としたDFが機能し、森・門山らの5連続速攻などで得点を重ね、前半を28対10で折り返す。

後半も豊田・東長濱・村上・藤田らの6連続得点で34対10。その後も宮崎らが11連続で得点し、リードを広げていく。GK松村も好セーブを連発し、64対14で勝利。

【得点】9点：宮崎、8点：末松、7点：村上、森、6点：豊田、藤田、5点：野村、4点：東長濱、3点：岸川、海道、門山、2点：武田、1点：富田

日本 27 (12 - 10、15 - 12) 22 中国

アジア大会の3戦目は地元中国。会場は中国サポーターで埋まり、完全アウェイの雰囲気での試合となる。立ち上がり、中国にポストシュートを決められ先制されるが、すぐに宮崎のミドルで同点。日本は早いパス回しからスピードを活かしたプレーで得点。対する中国は高さを活かしたプレーで得点していき、15分過ぎまで7対7の同点。20分過ぎ、日本はシュートミスから連続失点で9対10と逆転されるが、前半終了間際に豊田・野村・末松が3連続得点し前半を12対10で折り返す。

後半、村上の連続得点で14対10。5分過ぎには中国が不正交代で退場者を出す間に岸川・宮崎の得点で18対13。さらに富田の連続得点で20対14とし徐々に点差を広げていく。中盤には森・豊田・末松・東長濱らの5連続得点で25対16と9点差をつける。その後ミスから3連続失点するが、藤田のポストが決まり26対19。試合終了間際、日本が退場者を出す間に連続失点するものの27対22で中国に快勝した。

【得点】6点：豊田、5点：宮崎、3点：村上、2点：末松、岸川、富田、野村、東長濱、1点：藤田、森、門山

日本 54 (26 - 13、28 - 13) 26 インド

アジア大会の4戦目はインド。相手のパスミスから村上が速攻を決め先制。インドのゆっくりとしたセットOFにリズムを崩され失点するものの、富田・宮崎・野村・武田と連続得点で加点、15分までに13対6とリードする。その後もインドのミスを速攻に持ち込み、森・宮崎・東長濱が得点し前半を26対13で折り返す。

後半も攻撃の手を休めず、末松・豊田・岸川らが加点。DFもGKを中心に安定した連携で失点を抑え、8分までに32対15とリードを広げる。残り10分を切っただけでも藤田・海道・豊田・門山・野村らの連続速攻で得点を積み重ね、グループリーグ下位のインドに54対26で勝利した。

【得点】8点：豊田、宮崎、6点：末松、5点：東長濱、4点：武田、富田、3点：村上、岸川、森、野村、門山、2点：藤田、海道

日本 36 (16 - 14、20 - 14) 28 サウジアラビア

アジア大会、予選リーグの最終戦はサウジアラビア。

開始直後、門山・宮崎の豪快なミドルで2対0と先制。DFではGK松村の3連続セーブなどで開始10分で5対5の同点。相手のラフプレーで宮崎が一時、負傷交代する場面もあったが村上・豊田・武田らの連続得点で20分までに11対5とリードする。このまま勢いに乗りたい日本だが、3連続失点で13対11と2点差に詰め寄られる。悪い流れを野村・富田らの得点で凌ぎ、前半を16対14の2点リードで折り返す。

後半立ち上がり、日本は退場者を出してしまい、16対16の同点に追いつかれるが、すぐに宮崎・村上らの得点で19対17と再び2点リードする。サウジは徐々にスタミナを奪われ退場する場面が多くなると末松・門山らの得点で26対21。残り10分を切り、またもサウジに退場者が出ると、ここで一気に野村・東長濱らの得点で33対24と9点差。試合終了間際にはダメ押しの岸川のポストシュートが決まり36対28で勝利した。

最終戦のカタールー中国の試合が25対25の引き分けだったため勝点8で予選Aグループの1位通過が決定した。準決勝はBグループ2位のイランと対戦する。

【得点】7点：門山、6点：豊田、野村、5点：宮崎、4点：村上、3点：末松、2点：武田、1点：岸川、富田、東長濱

▼準決勝

イラン 30 (15 - 16、15 - 13) 29 日本

アジア大会、準決勝・イラン戦。武田のミドルで先制すると、豊田・岸川の連続得点で4対1とリードする。7分過ぎ、宮崎の連続得点6対3となるとイランは宮崎にマンツーマンDFを仕掛け、5-5での攻防となる。その後は村上・豊田・岸川・野村らの得点で20分まで13対7と6点リードする。しかし22分過ぎ、お互いに退場者を出してしまうと、この間に3連続失点を許し13対10。日本は門山のカットイン、岸川のミドルで加点するが、ミスからの連続失点で前半を16対15の1点差で折り返す。

後半、イランは宮崎・門山にダブルマンツーマンを仕掛け、OFのリズムを崩しにかかり、5分過ぎに18対19と逆転を許す。しかし、広がったDFのスペースをうまく利用し、門山が得点。さらに相手のパスミスに宮崎が速攻を決め20対19。DFでは



ベテランGK坪根が好セーブを連続し、両チームとも1点を争う試合展開となる。中盤は宮崎・武田・豊田らで加点するが、一步抜け出すことができない。残り10分を切り、末松のミドルで28対28の同点に追いつくとDFが踏ん張りを見せ、相手のミスを誘う。

シュートチャンスを得るもののゴールを決めること

ができず28対29と1点ビハインドに。残り2分、豊田のサイドシュートで再び同点。一気に逆転に持ち込みたい日本は残り1分、7mTのチャンスを得る。しかし、これを相手GKに阻まれてしまい、残り2秒で逆転ゴールを決められ29対30でタイムアップ。

【得点】7点：豊田、6点：岸川、5点：宮崎、3点：門山、2点：末松、村上、武田、野村

▼3位決定戦

日本 27 (13 - 10、14 - 10) 20 サウジアラビア

アジア大会、3位決定戦・サウジアラビア戦。準決勝のイラン戦と同様にゲーム開始直後から宮崎にマンツーマンを仕掛けるサウジに対し、門山の速攻で先制すると5分過ぎまで3対3の同点。流れをつかみたい日本はGK松村の連続セーブから村上・豊田が得点し5対3とリードする。中盤に一時8対9と逆転を許すが、サウジに退場者が出る間に野村・門山・宮崎と連続得

点で12対9。松村に代わって入ったGK坪根も好セーブを連続し、前半を13対10で折り返す。

前半終了間際に岸川がDFで危険プレーと判断され、レッドカードで退場し不利な状況だったが、富田がポストシュートを決め14対11。さらに村上・末松らの連続得点で20対14とリードを広げるとサウジは門山にもDFをつけダブルマンツーマンに。DFの広がったスペースを末松が効果的に攻め込み得点を重ねる。しかし23分過ぎ、末松が速攻で相手と接触しながら放ったシュートが相手GKの顔面に当たるとこれを危険プレーと判断されレッドカード。不利な状況にも海道・豊田がゴール。最後は試合終了間際に13mから打った宮崎のロングシュートが決まり、27対20で勝利。

両チーム合わせて12回の退場者が出る荒れた試合となったが12年ぶりにメダルを獲得し、大会を終えることができた。

【得点】8点：豊田、5点：末松、4点：門山、3点：宮崎、野村、2点：村上、1点：海道、富田

女子

▼予選Bグループ

日本 31 (14 - 14、17 - 13) 27 北朝鮮

アジア大会初戦は長らく国際舞台から遠ざかっていた北朝鮮。試合序盤は両チームとも初戦の緊張感もあかなかペースがつかめずにいたが、4分すぎから北朝鮮の強引な突破から失点を繰り返し2対6と追いかける展開となる。ここから日本も藤井・植垣・中村の活躍により6対7と1点差まで詰め寄り日本ペースになるかと思われたが、ここで相手に3連取を許し、またも4点差と広げられる苦しい展開が続いた。しかし、終盤にDFが機能しはじめると、北朝鮮のミスを誘い速攻につながり前半を14対14で折り返す。

後半に入ると、前半終盤から機能しはじめたDFが、北朝鮮OFを単調にさせ、苦し紛れのシュートをGK田代がセーブすると、日本OF陣もこれに答える形で後半10分すぎに20対16とリードする。ここから北朝鮮の粘りにあうが、DFで踏ん張りサイド陣若松・高橋の活躍もあり3連取・4連取と連続得点を重ね、残り5分で30対22と8点差となった。試合終盤、北朝鮮に連取を許す展開となり課題が出る部分もあったが、結果31対27で見事初戦を勝利した。

【得点】10点：藤井、5点：高橋、4点：植垣、中村、3点：東濱、若松、1点：伊藤、新城

日本 32 (19 - 6、13 - 10) 16 インド

アジア大会2戦目はインド。立ち上がり相手の強引な攻撃に対し受身なDFをしてしまい、3対2となかなかリズムが掴めず歯がゆい展開が続いた。前半8分すぎからようやく藤井・中村・植垣による速い展開での得点を重ね、前半を19対6とリードして折り返した。

後半に入ると立ち上がりから新城・伊藤の速攻で4連取し、着実にリードを広げてはいったのだが、インドの長い攻撃に対